

次の文章を読み、設問に答えなさい。

まだまだ、と思う。まだまだ、この花はほんとうの姿を見せていない。葉の向きを考え、茎を大きく切つて剣山※のけんざんの上で角度を確かめる。花菖蒲はなしょうぶのやわらかな紫むらさきがふつと霞む。花びらの向こう、ずっと前の列で一心に花を活けている朝倉くんあさくらくんの背中が目に入る。

5 朝倉くんが花を活けているとき、まわりの空気がぴんと張る。冷たいような、澄んだような空気の層ができて、そこに触れるのが畏れ多い感じがする。遠くから見つめているだけでじゅうぶんだと思う。

朝倉くんは中学の同級生だった。勉強ができて、野球部では一塁手いちろうしゅだった。友達も多そうだったし、女子にもわりと人気があったはずだ。この辺でいちばんの進学校に進んだことも知っている。でも、特に親しかったわけではなく、知っているのはそれくらいだった。野球部らしく丸刈りまるがりだった髪が伸びかけていた。野球は辞めたのかなと思った。

10 最初に見かけたときは驚きもしなかった。誰か、たとえばガールフレンドだとか妹だとかの付き添いつきそに来てるんだらうと思った。教室の後、花材を一式持ち帰るのがいつもけつこう大変だったからだ。

朝倉くん、と声をかけると、朝倉くんのほうはちよつとびっくりしたみたいだった。久しぶり、と笑った顔は野草がほころぶときみたいな青さを漂ただよわせた。

15 「誰を待ってるの？」私は辺りを窺うかがいながら訊いた。
「待ってないよ」

誰かを送ってきただけで待っているわけではないということだろうか。それ以上詮索せんさくするつもりはなかった。だから、時間になっても朝倉くんが教室にいて、帰るところか用具を揃えはじめるのを見てようやく驚いた。

20 男子が活け花を習いに来ること自体はめずらしいことじゃない。この教室にも何人かは男の子がいるし、朝倉くんが活け花にふさわしくないということでもない。そうではなくて、どうして①最初に見たときに気づかなかったのか、自分は朝倉くんを全然見ていなかったのか、ということは今さらながら知らされたのだ。朝倉くんは、クラスで勉強していた姿より、校庭でボールを追いかけていた姿より、ここで花を活けている背中がいちばん凛々りんりゃしい。

視界の隅で朝倉くんが動いたたびに、私も揺れた。朝倉くんは今、どの花を見て、どの花に触れているだろう、

25 と思いながら手元の花を活ける。うまくはいかなかった。いつもと変わらず、思うようには活けられない。教室が終わりに近づいて、生徒の作品を鑑賞かんしょうしあう時間になると、私は前のほうへ移動し、朝倉くんの席に近づいて彼の花を覗いた。

美しかった。私はその花に釘付けになった。私だけではない。みんな朝倉くんの花を遠巻きにして息をひそめていた。思うように活けられない、と私がいつも思っている、その「思うように」をはるかに超えた花だった。私が思うことなんか、たかが知れている、と思った。

30 教室の帰りに朝倉くんを追った。花材と華道具かどうぐを籠かごにaツんで自転車に跨またがろうとしているところに駆けていき、後ろから声をかけた。「待って」

朝倉くんが振り返る。

「朝倉くんの花、すごくよかった」

はにかんだような目が、まぶしい。こんな表情もできるひとだったんだ。

35 「いや、まだまだだよ」日に焼けた顔でそういつて片手を挙げると、朝倉くんは自転車で走っていった。陽射しの中を自転車で走る。今年は春の勢いがいい。汗ばむような陽気だ。大きな川のカーブする外側の小さな町の、役場や公民館や商店街のある一角から自転車で十五分。古くからの住宅地に、ぼつんぼつんと店が混じる。そこに、うちがある。通りに面して骨董品店。その奥が住居になっている。

40 家に入ると、急いで瞬きをしなくちゃならないくらい薄暗い。窓が高くて小さいせいだ。ぼんやりした光に、漆喰しつしゅくの壁と黒光りする廊下が白黒写真みたいに浮かびあがる。裸足で上がると廊下は磨き込まれてひんやりしている。

「あら、帰ってたの」台所で母が振り返る。「やだ、また裸足」

肩かたをすくめて通り過ぎると、奥の部屋から出てきた祖母に呼びとめられた。「今日の花、さっそく活けてごらんよ」

45 「待って、あとでね」そそくさと自分の部屋に逃げる。

「あとで、はないよ、あとになったらチャンスはもうないんだよ」祖母の声が追いかけてくる。何をいわれても同じだ。今はぜんぜん活けたくない。朝倉くんのあんな花を見ちゃった後に、自分で活ける気にはなれない。

二階の部屋は庭を挟んで土手に面している。部屋の窓を開けて、外を見る。庭に雛芥子ひなげしが咲いている。その向

50 こうに土手の緑が続く。土手の上は桜並木で、向こう側は川原だ。広場や散歩道があつて、大きな川がゆるやかに流れる。

幼い頃、よく姉妹三人でこの土手にすわつてお弁当を食べた。そのときの、姉たちの蝶々みたいなひらひら飛びまわる笑い声と、おひさまの光と、川の流れる音とが、今でもこの土手のどこかに残っている感じがする。紗英、紗英、と呼んでいた。②紗英はお豆さんだからね、と笑う姉たちの声。

55 晴れた日の午後には土手の白詰草を編んで冠をこしらえた。花の冠をお互いの頭に載せあつてうつとりする姉たちを覚えていて。やがて姉たちは私の頭にも冠を重ねてくれた。お姫さまみたいだよ、紗英、可愛いね。冠はやわらかな土と若草の匂いがした。可愛いね、と姉たちに微笑まれると、夢見心地になった。自分はお姫さまなのだと思ひもしなかったあの頃を思うと、つい口許がほころぶ。いずれ現実には直面するときは来る。幼いひととき、自分を可愛いと思ひ込むことができて私はしあわせだった。

60 昔たしかにあつたものは、消えてなくならない、だろうか。上の姉は遠くの大学へ通うために家を出てしまい、下の姉ももう土手にすわつてお弁当を広げたりはしない。私だけが土手を見ている。それでも、そのあたりにまだあの頃の光や風がさざめいている気がする。

「紗英はお豆さんだからね」

65 窓から外に向かつていつてみる。お豆さんというのは、お豆みたいに小さい子、という意味らしい。小さくて、面倒を見てあげなきゃいけない子。それは単に三姉妹の一番下だからということだけでなく、いつまでも下の立場に喜んでいる子だったということだろう。姉たちがふたりでなんでも引き受けてくれて、私はのほほんと楽しかった。まだまだお豆さんでいられる、と意識していたわけではないけれど、少なくとも、「まだまだ」を厳しい意味で使ったことはなかった。朝倉くんの花を見るまでは、たぶん一度も。

活け花教室で次に朝倉くんと会ったときに私は訊いた。

70 「まだまだ、つて、どうしてわかるの」

え、と朝倉くんが顔を上げる。

「こないだ、まだまだだつていったよね。どうしてそう思うの。どうしたらまだまだじゃないかなるの」

75 まだまだ届かない、思うようには活けられない。朝倉くんは自分の花をそう評した。

「ちよつと、紗英」千尋が私の左肘をついて止めようとしている。千尋は親切だから私が突っ走り気味になると上手に制御してくれる。この活け花教室を紹介してくれたのも千尋だった。

「わかるときはわかるんじゃないかな」真面目な声で朝倉くんはいった。それからちよつと笑った。

「謙遜だとは考えなかったんだね」

「え、謙遜だったの？」私が驚くと、冗談だよ、という。

80 「花を活けてると気持ちがいいだろ。思った通りに活けられると、気持ちのよさが持続する。そのやり方をここに習いに来てるんだ。みんなもそうなんじゃないの」

「なるほど」私は感心して何度もうなずいた。「気持ちのよさが持続する。なるほどね」

朝倉くんは、やめて、恥ずかしいから、といった。

85 「なるほど。気持ちのよさを持続するために」うなずきながらも一度私がいうと、朝倉くんはしつしつと追い払う真似をした。

思った通りに活ける、と朝倉くんはいったけれど、私の「思った通り」じゃだめなんだと思う。私なんかの思つたところを超えてあるのが花だ。そう朝倉くんの花が教えてくれている。

じゃあ、なるべくなんにも考えないようにして活けてみよう。

その考えは、しかし間違いだつたらしい。

90 「津川さん、真面目におやりなさい」先生は巡回してきて私の花を見るなりそういった。「しようがないわねえ」

いつもなら、注意されることはあつても先生の目はあたたかい。しようがないわねえ、と笑っている。でも、今日は違った。③基本形を逸脱したためちやくな花がよほど腹に据えかねたらしく、剣山から私の花をぐさぐさ抜いた。

95 「どういうつもりなの」声は怒りを抑えている。周囲の目がこちらに集まっている。

「いつもの津川さんじゃないわね。遊び半分で活けるのは、花を裏切ったことになるの」

すみません、と私は謝った。遊び半分なんかじゃなく、④真剣に考えたらこうなつただけで、普段は穏やかな先生の剣幕を見たらやつぱりそれはいえなかった。先生は花を全部抜くと大きくため息をついて、ふいと立

ち去ってしまった。

千尋と目が合う。どんまい、と目だけで笑ってくれる。もう一度水切りをしておして、少し茎の短くなつてしまった花を見る。またいつもみたいに、習った型の通り順番に差していくんだらうか。型通りなら誰が活けても同じじゃないか。私はこつそり辺りを見まわす。みんな、おとなしく従っているのはなぜなんだらう。——そんなふうにするなんて不遜だし傲慢だ。だけど急に、目の前の花が色褪せて見える。もしかしたら⑤活け花はどうしても私がやらなきゃならないことじゃないのかもしれない。

このまま塾に行くという千尋と別れて帰ろうとしたら、市民センターの出口のところに朝倉くんがいた。自然にふたり並んで歩き出す。

「どうして私を待ってたの、とか訊かないか普通」朝倉くんがいうので初めて気がついた。

「そっか、朝倉くん、あたしのこと待っててくれたんだ」

「……いいよなあ、さえこは」

A「さえこ。懐かしい呼び名だ。久しぶりに聞いた。さえこ、さえこ、と中学のクラスメイトは呼んだ。ほんとうの名前は紗英なのに、そこになぜか子をつけて、紗英子、それが私の愛称だった。紗英、と呼び捨てにするほど親しくない同級生たちにとつて、子をつけるだけでフェイクになる。紗英子なら呼べる。そういうことらしい。彼らは私を呼びたかったのだ。さえこ、さえこ、と気軽に愛称で呼べて、さえこはいいよなあ、なんていえる存在が欲しかったんだと思う。事実、私は一日に何度も名前を呼ばれ、さえこ、さえこ、と手招きされる。さえこはいいね、さえこはいいよなあ。何がいいのかよくわからないけど、みんなにそういわれるのがこそばゆくて、うふふ、と笑う。そうすると彼らはいよいよもって、いいよなあ、と繰り返す。」

「さっきの、先生に注意されてた花、見たよ。びっくりした。あれ、遊んでたんじゃないよな、確信犯だよな」

うーん、と私は言葉を濁す。

「自分でもどうしたいんだかわからなくなっちゃった」

「それもわかった、あの花見たら」朝倉くんはそういつて笑う。「やりたいことはなんとなく伝わってきた。面白くも思ったよ。でも、何百年もかけて磨かれてきた技に立ち向かおうと思つたら、足場が必要だろ。いきなり自己流じゃ太刀打ちできない」

市民センターを出ると陽射しが強い。自転車置き場まで並んで歩く。

(中略)

後ろから肩を叩かれて、ひやつと飛び上がる。古典の細谷先生だった。

「そんなにびっくりしないですよ」彼女は笑って、私が見ていたものに視線を戻す。図書室の前の廊下に飾られた

花だ。華道部の作品らしく、生徒のクラスと名前の書かれた紙が置いてある。

「お花に興味ある？」

いえ、と私はいう。

「あなた心得があるでしょ。華道部はどう。今、部員募集中なのよ」

いえ、いえ、と私はさらに後ずさる。

「あなたみたいなひとが入部してくれたら、さぞかしひとが集まるんじゃないかと思うの」先生は、ふ、と笑った。笑っているのに口の端が下がって見えた。

「わかるでしょう、そんなに真剣にならなくていいの。部活の間、楽しく笑って過ごしてくれればそれでいいの。その代わり、男子なんかも勧誘してくれるとうれしいんだけどな。そういうの、得意よね」

ああ、こういうことをいおうとする直前にひとの目はいきいきするんだな、と私は先生の光を帯びた目を見て思う。光って、べたべたしている。

「どうかな。考えてみてくれるかな」

いつものあなたみたいなのに、ふわふわと、気持ちのいいところだけ掬って。そういわれた気がした。私は壁に凭れていた背を起こす。

「その花、顧問の先生のご指導ですか」

「そうだけど——顧問は私よ」

「それでしたら、けっこうです」

「どういうこと」

「その花、面白くありません」

細谷先生は胸の前で腕を組んだ。

150 「それはまた津川さんらしくない感想ね」

「あたしらしくない感想、ですか。もしも普段のあたしらしくなかったら」いいながら、なぜか笑い出したくなった。

「わあ、このお花、上手ですねえ、きれいでですねえ、なんてb テキトウに誉めて逃げるだろうってことですか」

「あらま」細谷先生は私の目の前まで一足に踏み込んできた。

「自分でよくわかってるんじゃない」

155 「あたしらしくない、ですよ」

「そうなのだ、私らしくないのだ。たぶん、⑥ひとが思う私らしさとは違うところでぐんぐんと根を張っていたものが、今、ひよいと地面から顔を覗かせたんだろう。」

160 B 「あなたの普段の姿は演技つてわけ」細谷先生の眉間にくつきりと皺が刻まれている。私はできる限りにこやかに笑う。いいなあ、さえこのその屈託のない笑顔、つられて笑いたくなっちゃうよ。いつもみんなにそういわれる。その笑顔で、今、笑えているだろうか。】

「演じてなんかいないんですよ」さえこの笑顔のままで、私はいった。「面白くない花は面白くない、それくらい、あたしだっていうんです」

「……ねえ、調子に乗ってるんじゃないわよね」

165 「ぜんぜん乗ってませんよ、普段通りです」私は平気な顔で踵を返す。先生がまだあの光る目で私を見ている。背中に痛いほど視線を感じる。なんでこんなことになっちゃったんだろ、と思いながら私は階段を下りた。

(中略)

170 「あたしの花ってどんな花なんだろう」濡れた髪を拭き、ほうじ茶を飲みながら漏らした言葉を、祖母も母も姉も聞き逃さなかった。

「紗英の花？」

「私らしい、といういい方は避けようと思う。自分でも何が私らしいのか、今はよくわからないから。」

「あたしが活ける花」

175 「紗英が活ければぜんぶ紗英の花じゃないの」母がいう。私は首を振る。

「型ばかり教わってるでしょう、誰が活けても同じ型。あたしはもっとあたしの好きなように」といいかけて、私の「好き」なんて曖昧で、形がなくて、天気や気分にも左右される、実体のないものだと思う。そのときそのときの「好き」をどうやって表せばいいんだろう。

母は察したように穏やかな声になる。「そうねえ、決まりきったことをきちんきちんとこなすっていうのは紗英に向いてないかもしれないわねえ」

180 そうかな、と返しながら、そうだった、と思っている。すぐに面倒になってしまふ。みんながやることなら自分がやらなくてもいいと思ってしまう。

「でもね、そこであきらめちゃだめなのよ。そこはすごく大事なところなの。しっかり身につけておかなきゃならない基礎って、あるのよ」

「根気がないからね、紗英は」即座に姉が指摘する。

185 「ラジオ体操、いまだにぜんぶは覚えてないし」

「将棋だってぜんぜん定跡通りに指さないし」

「囲碁でもおんなじ。定石無視してるから強くなれないのよ。いつつもあつという間に負かされてるじゃない。長い歴史の中で切磋琢磨してきてるわけだからね、定石を覚えるのがいちばん早い」

190 「早くなくてもいい」ただ楽しく打てればいい。そう思っ、棋譜を覚えてこなかった。数え切れないほどの先人たちの間で考え尽くされた定石がある。それを無視して一朝一夕に上手になれるはずもなかった。

「それがいちばん近いの」

「近くなくてもいい」

姉は根気よく言葉を探す。「いちばん美しいの」

195 美しくなくてもいい、とはいえなかった。美しくない囲碁なら打たないほうがいい。美しくないなら花を活ける意味がない。

「紗英はなんにもわかってないね」祖母が呆れたようにため息をつく。「型があるから自由になれるんだ」自分の言葉に一度自分でうなずいて、もう一度繰り返した。「型があんたを助けてくれるんだよ」

はっとした。型が助けてくれる。そうか、と思う。そうだったのか。毎朝毎朝、判で押したように祖母がラジ

200 オ体操から一日を始めることに、飽きることはないのかと。フシギに思っていた。そうじゃなかったんだ。毎朝のラジオ体操が祖母を助ける。つらい朝も、苦しい朝も、決まった体操から型通りに始めることで、一日をなんとかまわしていくことができたのかもしれない。楽しいことばかりじゃなかった祖母の人生が型によって救われる。そういうことだろうか。

「いちばんを突き詰めていくと、これしかない、というところに行きあたる。それが型というものだ。私は思っているよ」

205 今、何か、ぞくぞくした。新しくて、古い、とても大事なことを聞いた気がした。それはしばらく^{※⑩}耳^{みみ}の辺りをぐるぐるまわり、ようやく私の中に滑り込んでくる。

型って、もしかするとすごいものなんじゃないか。たくさんさんの知恵^{ちえ}に育まれてきた果実みたいなもの。囓^{かじ}つてもみないなんて、あまりにももったいないもの。今は型を身につけるときのなのかもしれない。いつか、私自身の花を活けるために。

210 今は修業^{しゅぎょう}のときだ。そう思ったら楽しくなった。型を意識して、集中して活ける。型を身体に叩き込むよう、何度も練習する。さえこも紗英も今は知らない。⑦型を自分のものにした。いつかその型を破るときのために。

「本気になったんだ」私の花を見て、朝倉くんがつぶやいた。

桜並木の土手の上を、自転車を押していく。朝倉くんが川のほうを見ながら前輪ひとつ分だけ前を行く。^{※⑪}茴香^{ふうきょう}が無造作に新聞紙に包まれて籠にある。車輪からの振動で黄色い花が上下に細かく揺れている。

215 「それで今日の花なんだね。さえこが本気になると、ああいう花になるんだ」ちよつと振り返るように私を見て、朝倉くんがいう。「なんだか、意外だ」

意外だなんてよくいう。私のことなんか知らないくせに。ふわふわのところしか見てなかったくせに。

でもさ、といって朝倉くんは自転車と一緒に足を止める。川原のほうを指さして、下りる？ と目で訊く。

「意外だったけど、面白くなりそうだ」

220 土手から斜めに続く細い土の道を、勢いよく下りはじめる。私は後ろからそろそろと下りる。自転車のハンドルを握って、勢いがつかないよう力を込める。一步一步踏みしめて、それでも最後は駆け足になる。自転車が跳ね、籠から茴香が飛び上がった。

下りきったところに朝倉くんはスタンドを立てる。私が隣に自転車を停めるのを待って、川縁のほうへ歩き

出す。

225 「さえこが本気になるなんて」

「さえこ、って呼ばないで。ほんとうの名前はさえこじゃないの」

朝倉くんがゆつくりとこちらを向くのがわかる。私は川面が新しくなったり古くなったりしながら流れていくのを眺めている。

「知ってるよ」

230 「じゃあ、ちゃんと名前と呼んで。これがあたし、つていえるような花を活けたいと思ってるの。さえこじゃないの」

「うん」

「⑧さえこじゃなくて、紗英の花。まだまだ、遠いけど」

さえこの花は、といいかけた朝倉くんが、小さく咳払いをして、いい直す。

235 「⑨紗英の花は、じつとしていない。今は型を守って動かないけど、これからどこかに向かうとする勢いがある」

「型通りに活けたのに？」聞くと、大きくうなずいた。

「俺、ちよつとどきどきした」

240 どきどきした、と朝倉くんがいう、その声だけでどきどきした。朝倉くんがまた川のほうを見る。太陽が水面に反射してまぶしい。

なんとなく別れがたくて自転車を押したまま桜並木の下を歩く。土手は紫陽花の盛りだ。水色や淡い紫のぼんぼんみたいに大きな花が、午前中の雨を残していきいきと咲き誇っている。

245 そろそろ引き返さなくては、家に着いてしまう。朝倉くんの家からは遠ざかるばかりだ。でも、ここから、どこへ行こう。どこへも行く宛てはない。じゃあ、ここで、といわれるのが惜しくて、立ち止まることもできない。朝倉くんも何もいわない。ただずつと歩いている。

紗英、と呼ばれて振り向くと、通りの向こうに姉がいた。買い物帰りらしく、紙袋を提げてこちらに手を振っている。隣の朝倉くんがにわかに緊張するのが伝わってくる。そんなことはおかまいなしに、姉が近づくと、姉がお世話になりまして、とにこにこしている。

「朝倉くん、姉の七葉」

振り向いてびっくりした。朝倉くんが顔を真っ赤にしている。ああ、こういうことは何度もあった。まったく、なのちゃんはこのだからだめだ。いや、だめなのは朝倉くんだ。

「お花の帰りだから。もうすぐ帰るから」それだけいって、強引に朝倉くんを回れ右させた。自転車を押してずんずん歩く。何もいわずにずんずん歩く。少し遅れて朝倉くんがついてくる。ずいぶん歩いて商店街の角まで戻ってから、ようやく思いついたことを口にした。

「自慢じゃないけど」私が口を開いて、朝倉くんはほっとした顔になる。

「なに」

「なのちゃんは何かに夢中になると三日ぐらい平気でお風呂に入らないよ」

朝倉くんが声を落とす。「それはほんとに自慢じゃないね」そうして、はは、という。笑ったんじゃない。困って、笑ったふりをしている。

「出かけない日は顔だつて洗わないよ」

「そう」

「大食いだし」

「うん」

「それに」

「まだあるの」

「まだまだ、まだまだ」

他に何があったか、姉の弱点を私は必死に思い出そうとしている。まだまだ、⑩私もまだまだだ。いつか私だけの花を活けて、朝倉くんをはっとさせたい。姉のことなんか目にも入らないくらい私の花を見つけてくれたらいい。そつと盗み見たら、朝倉くんはまだ困っているみたいで横顔で籠の中の花を見ていた。

(宮下奈都「まだまだ」、『つぼみ』所収)より)

〈語注〉

※① 剣山：活け花で使う、花をさして根元を固定する道具。

※② 漆喰：石灰などから作る、壁を塗る材料。

※③ 逸脱：外れること。それること。

※④ 水切り：花を長持ちさせるために、茎を水の中で切ること。

※⑤ フェイク：にせもの。代わりのもの。

※⑥ こそばゆい：照れくさい。

※⑦ 確信犯：問題を引き起こすことがわかっていながら、それを行う人。

※⑧ 屈託のない：なやみがない。

※⑨ 踵を返す：来た方向へ引き返す。

※⑩ 定跡：将棋で、昔からの研究により、もっとも有利とされている駒の動かし方。

※⑪ 定石：囲碁で、昔からの研究により、もっとも有利とされている石の打ち方。

※⑫ 切磋琢磨：学問や芸などにはげみ、向上させること。

※⑬ 棋譜：将棋や囲碁の対局の手順を表した記録。

※⑭ 一朝一夕：わずかな月日のたとえ。

※⑮ 判で押したように：いつも同じようなさま。

※⑯ 耳朵：耳。

※⑰ 茴香：セリ科の花の一種。

※⑱ ぼんぼん：毛糸などで作った丸い玉。

〔設問〕解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

- 一 線 a 「ツ」(30行目)、b 「テキトウ」(152行目)、c 「フシギ」(199行目)のカタカナを、漢字で書きなさい。
- 二 線①「最初に見たときに気づかなかった」(19～20行目)とありますが、「私」はどのようなことに「気づかなかった」のですか。説明しなさい。
- 三 線②「紗英はお豆さんだからね、と笑う姉たちの声」(53行目)とありますが、ここから「私」と姉たちとの関係がどのようなものであったことがわかりますか。説明しなさい。
- 四 線③「基本形を逸脱しためちやくちゃん花」(93行目)、線④「真剣に考えたらこうなった」(97行目)とありますが、「私」がこのような花を活けたのはなぜですか。説明しなさい。
- 五 線⑤「活け花はどうしても私がやらなきゃならないことじゃないのかもしれない」(103～104行目)とありますが、「私」がこのように考えたのはなぜですか。説明しなさい。
- 六 線⑥「ひとが思う私らしさとは地面から顔を覗かせたんだらう」(156～157行目)とありますが、これはどのようなことを表していますか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。
ア いままで無理をしておさえこんできた、「ひとが思う私らしさ」とは異なる「私」の姿が、華道部が活けた花に対する皮肉な言動として現れた、ということ。
イ いままで無理をしておさえこんできた、「ひとが思う私らしさ」とは異なる「私」の姿が、華道部への勧誘に対するあからさまな拒否として現れた、ということ。
ウ 知らないうちに自分の中で育っていた、「ひとが思う私らしさ」とは異なる「私」の姿が、先生が指導した花に対する否定的な感想として現れた、ということ。
エ 知らないうちに自分の中で育っていた、「ひとが思う私らしさ」とは異なる「私」の姿が、先生のふるまいに対する反抗的な表情として現れた、ということ。
- 七 線⑦「型を自分のものにした」(211行目)とありますが、「型を自分のものに」するとはどういうことですか。「型」がどのようなものかを明らかにしながら、説明しなさい。
- 八 線⑧「さえこじゃなくて、紗英の花」(233行目)とありますが、ここで「私」は、「さえこ」をどのような自分だととらえていることがわかりますか。A【】の部分(111～117行目)とB【】の部分(158～160行目)に注目して、説明しなさい。

行目)に注目して、説明しなさい。

- 九 線⑨「紗英の花は勢いがある」(235～236行目)とありますが、ここで「朝倉くん」は、「私」の活け花についてどのように思っていますか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。
ア 「私」の花を活ける才能を初めて理解し、その作品のすばらしさに恐れをいだいている。
イ 「私」の花を活ける技術が向上したことを理解し、その作品のできばえに満足している。
ウ 「私」の活け花に対する熱意の高まりを理解し、その作品の完成度にあせりを感じている。
エ 「私」の活け花に対する姿勢の変化を理解し、その作品の持つ可能性に魅力を感じている。
- 十 線⑩「私もまだまだだ。私の花を見つめてくれたらいい」(267～269行目)について、本文全体をふまえて、以下の問いに答えなさい。
(1) 部「まだまだお豆さんでいられる」(66行目)の「まだまだ」と、「私もまだまだだ」の「まだまだ」の使い方がいから、自分に対する「私」の考え方がどのように変化していることがわかりますか。説明しなさい。
(2) 「私だけの花を活けて、朝倉くんをはっとさせたい」とありますが、どういうことですか。169～240行目をよく読んで、「私だけの花」がどのようなものを表しているかを明らかにしながら、説明しなさい。
(3) 「姉のことなんか目にも入らないくらい私の花を見つめてくれたらいい」とありますが、ここで「私」は、姉たちとの関係をどのように変えていきたいと思っていることがわかりますか。説明しなさい。

〈問題はここです〉

受 験 番 号	
氏 名	

(2 0 2 0 年 度)

九 八 七 六 五 四 三 二 一

									a
									b
									c

国語解答用紙

+

3 2 1

	(合 計)
--	-------

	(整理番号)
--	--------